

<報 告>

日本統治時代の台湾生活誌 (XIII)

柴 公 也

(50) 官営移民の頃

山下義一 (1907 年生) 吉野尋常高等小学校；花蓮港夜間中学卒

私の両親は、広島竹原の小農の出身です。父は、元は商船の船員で、欧州航路などを往来していたそうです。それが、船員では将来が見通せないということで、一念発起して新天地を求め、台湾の官営移民として花蓮港庁の吉野村に移住することになったとのこと。私が竹原小学校の一年を卒業する時で、大正 3 年のことでした。

兄妹は 8 (*男 6 人、女 2 人) 人で、私は次男でしたが、長男は私の生まれる前に 3 歳で死んでいたもので、私が長男代わりとして育てられました。三男は、学校を卒業してから内地に渡り浪花節の修行をしています。現在は、106 歳になりますが、まだ元氣です。四男は、家を継いで農業に従事しておりました。三男は中支、四男は南方戦線に従軍していましたが、無事復員しています。ただ、五男は、フィリピンのレイテ島で戦死してしまいました。

吉野村は、全国から移民が来ていましたが、特に徳島県の吉野川流域からの人たちが多く入植していました。最初は、言葉が通じにくい場合もありましたが、共通語を使うようになってからは言葉による問題はなくなりました。

村は、宮前、清水、中園、草分の四つの部落から成っていましたが、それぞれ百戸ぐらいが入植しておりました。私たちの入植した草分部落には、五十坪の屋敷に農家向きの家が用意されていました。土地はアミ族から買い上げたものを移民たちに払い下げたもので、水田向きと、畑向きの合計三町歩が割り当てられていて、手厚い保護政策でした。

当時、吉野村は砂利道で、電気は通じていましたが、家ごとの水道はなく、水道タンクの水を共同で利用しておりました。風呂は共同風呂を利用していました。花蓮港との間には鉄道と手押しのトロッコが通じておりましたが、普段は自転車で行っていました。

買い物は、各部落に購買部があり、日用品は何でもそろっていました。最初は医者がいなかったのですが、後に産業組合によって吉野病院が開設されました。神社は吉

野神社があり、寺は西本願寺の寺がありました。駐在所の巡査は全員内地人で治安の維持に当たっておりましたが、事件らしい事件はほとんど起きませんでした。

平和な村でしたが、四男がアミ族との間に大変な事件を起こしたことがありました。それは、四男が馬に乗ってアミ族の部落を通っていたのですが、馬が珍しかったのかアミ族の子供が走って馬に近付いてきたのです。それに驚いたのか、馬が突然後ろ脚を蹴り上げたというのです。それが子供を直撃し、当たり所が悪かったのか死んでしまったのだそうです。その後、警察が子供の親との間に入り、示談で慰謝料を払い、その場は一応おさまったとのことでした。

それが、終戦後、立場が逆転してから、子供の親がアミ族の老鰻（*ごろつき）を引き連れて、慰謝料が足りないと難癖を付けられて大金を奪り取られたそうです。私の家だけではなく、村の顔役だった人たちも、老鰻たちに「威張っていた」と難癖を付けられ、殴られはしませんでした。金が脅し取られていました。ただ、決して仲が悪かったわけではなく、普段は仲良く付き合っていたのです。

小学校の頃のアミ族は、赤い毛糸のような飾りの付いた黒い頭巾と民族服を着て、腰には蕃刀を提げておりました。男も女もビンロウの実を嚙んで道に赤い唾を吐き散らしていました。建前上、アミ族も日本人でしたが、内心ではアミ族は蕃人で内地人とは違うと思っていました。ただ、台湾人に対しては内地人とは習慣は違うが、それでも同じ日本人と思っておりました。一方、支那人や朝鮮人に対しては、正直言って軽蔑していました。当時は、蒋介石や王精衛の名前は知っていましたが、毛沢東や周恩来の名前は聞いたこともありません。

官営移民の主要な作物は砂糖黍の栽培で、それを塩水港製糖会社に売って生計を立てていたのです。焼け付くような太陽の下で脂汗を流し、風土病のマラリヤや、チフス、ツツガムシ等と闘いながらの辛い作業でした。農地が広いので、プラウという大型の鋤を水牛に引かせて畑を耕していました。内地と比べると規模の大きな農作業でした。家と畑との往復には、軽トラックの代わりに、水牛に引かせた牛車を利用していました。最初は苦労の連続で、生活が安定するまでには三年ほどかかりました。

その後、専売局から葉煙草の栽培が奨励され、葉煙草を作るようになりました。それを乾燥室で乾燥して、ジャスミン煙草の原料として専売局に納めるのです。これは利益率が良くて、皆が栽培するようになりました。私の家でもアミ族の作男を雇って、煙草乾燥室を二棟持つ豊かな農家になっていたのです。

吉野村は、中園部落に吉野小学校がありました。家からは、子供の足で歩いて一時間ぐらい掛かりました。完全に内地人だけの学校で、台湾人やアミ族の子供はおりませんでした。クラスは男女一緒でしたが、席は男女が別になっていました。先生方は概して優しく、無闇には叩きませんでした。

服装は、着物に兵児帯で下駄を履いておりました。ランドセルはなく、本や弁当は

風呂敷に包んで行きました。運動会や学芸会は今と同じように父兄が参加して盛大に行っていました。娯楽の少なかった当時としては、村の一大行事でした。当時は、子供の遊びも限られていて、かくれんぼや鬼ごっこ、それと三角ベースの野球などで遊んでおりました。

私の母は、西本願寺の婦人会の世話役をしていましたが、その関係で寺の日曜学校に通わされました。私は成績が良くて優等生で通しましたが、花蓮港には中学校がありませんでした。それで、中学は諦め、大正9年に吉野小学校の高等科に入りました。卒業生の大部分が高等科に進んでいたと思います。

高等科に入って一学期が終わった頃、吉野郵便局の清水半平局長にスカウトされ、吉野郵便局で見習いをするようになりました。何でも、小学校の卒業式に来賓で参列した際、私が成績優秀で表彰された時から目を付けていたとのこと。郵便局の職員は、清水局長だけで、奥さんが事務を手伝っていました。局長には、私と同年代の息子が二人いました。局長の家に住み込んで働いておりましたが、実の息子のように可愛がられ、下駄や着物も買ってもらいました。

清水局長は、郵便局の給料だけでは足りないと言って、副業に種苗屋を開いていました。私は種苗屋も手伝って、頂いた給料は全部母へ渡しておりました。それが後に積り積って土地を増やす呼び水となりました。

三年ほど吉野郵便局に勤めてから、台北の通信講習所に官費で入所することになりました。講習所では、主に一般常識と通信技術を習いました。校舎と寮が同じ敷地にありましたが、台湾人も何人か入所しておりました。当時の台北は、戦争の始まる大分前ですから、平和で安定しておりました。内地人と台湾人との仲も悪くはなく、平穏な日々が続いていたのです。

私は、通信講習所で一年間学んでから、大正13年に花蓮港郵便局へ異動になりました。花蓮港郵便局では、電信係、船舶無線係、為替貯金係、保健係、郵便係と、郵便局の各業務を体験しました。郵便局には台湾人やアミ族もいて、主に配達の仕事を受け持っていました。中には事務を担当している者もおりました。皆、揉め事を起こすことなく与えられた仕事をこなしていました。花蓮港に移ってから間もなく、補助衛生兵の訓練を三か月間受けさせられました。花蓮港では、街の中に一軒家を借りて住んでいました。風呂は共同浴場ではなく、内地人の大工に特注した檜造りの風呂桶で湯浴みしていました。

当時、花蓮港から台湾西部の台中に郵便を送る場合は、中央山脈の分水嶺を徒歩で越えて運んでおりました。分水嶺と言っても2500メートル近くありますから、冬季には氷点下に下がることも珍しくありません。配達夫の中に、「アウイワタン」というアミ族の青年がいましたが、ある日、この青年が郵便物の入ったリュックを背にして台中へと向かいました。中央山脈の分水嶺に差し掛かった時、寒さに慣れていなかった

たためか、不運にも凍死してしまいました。私は、同僚らと一緒に、「アウイワタン君 遭難の地」と刻まれた木製の慰霊碑を担いで登り、遭難した場所に建てて冥福を祈ったのです。

仕事に慣れてからは、郵便の業務に従事しながら夜間中学（*三年制）に通うことになりました。年齢はまちまちで、13歳頃から20歳位までが同じ教室と一緒に学んでいました。台湾人も何名か在学していたように思います。同級生の中には、大西君のように優秀で、卒業後台北医専に入学し、後に大阪で病院を開業した者もおります。当時の夜間中学には、学力が足りないからではなく、家の事情で普通中学に進めなかった優秀な子供が少なくなかったのです。

先生方は、一人小学校の先生がおりましたが、他は病院の事務長や、新聞社の社長、花蓮港の駅長など、街の名士が担当しておりました。社会的な経験が豊富な人たちですから、この夜間中学で学んだことは、私の一生の財産となりました。

授業は午後6時から9時まででしたが、教室は花蓮港小学校の校舎を使っていました。入学試験はありませんでしたが、私は成績優秀だったので特待生で通し、授業料を免除されていました。科目は普通中学と同じでしたが、英語や体操はなかったように記憶しています。卒業式には、優等賞として三省堂の『廣辞林』を授与されました。私は仕事をしながら普通文官試験に挑戦していましたが、念願叶って三回目に合格しました。

私は二十九歳となり、妹の義母の紹介で見合いをし、結婚することになりました。妻の両親は愛媛県出身で、花蓮港庁の豊田村で雑貨屋を経営しておりました。妻は、花蓮港高女を出ており、幼稚園の先生を経て豊田小学校の先生をしていましたが、二十三歳の魅力的な女性でした。ただ、両親は既に亡くなっており、一人いる弟を東京の大学へ進学させていました。結婚式は、仏前結婚でした。

私の今日があるのは、全く妻の内助のお陰です。私は郵便局に十年余り勤め、普通文官試験に合格して判任官に補されておりました。後には、奏任官に昇っています。妻は結婚すると、直ぐに学校の先生を辞めて、私の家庭に入ってくれました。当時は結婚してからも働くのは、亭主に甲斐性がないからだという空気がありました。

私の家は大農家で、両親と私の下に六人の弟妹がいました。その中を良く切り回し、弟妹の世話をしてくれました。弟妹も妻を尊敬してくれ、皆が仲よく暮らしておりました。妻は、浄土真宗の寺の世話人も務め、信徒の人たちからも篤く信頼されておりました。

その後、私は台中郵便局に異動となり、郵便主幹に続き、庶務主任に補されました。台中でも、事務は内地人が担当し、配達は台湾人が担当していましたが、何人か事務を担当する台湾人や配達を担当する内地人もおりました。

台中は、領台後に新たに建設された都市で、碁盤の目のように街路が縦横に通って

いました。図書館などの文化施設も充実し、文化都市としての威容を誇っていました。家は、庭付きの一戸建てで、部屋が三部屋ほどあり浴室もついていました。私は、花蓮港で使っていた檜造りの風呂桶が気に入っていましたが、運送屋に無理を言って台中まで運んでもらい、浴室に据えつけて入浴しておりました。

台中郵便局に勤めて二年も経たないうちに、今度は台北市にある総督府通信部の総務部用品係への異動を命じられました。仕事は、台湾全島の郵便局の備品類の面倒を見る仕事でした。職員は、大部分内地人でしたが、一部台湾人も働いていました。家は、最初の半年間は適当な住居が見つからなかったので、郊外の北投温泉の旅館の一室に仮住まいをしていました。その後、市内の建具屋の二階に移り、次に適当な一軒家が見つかったので、そこに落ち着きました。

昭和 16 年の 12 月に大東亜戦争が始まり、私たち男の兄弟は四人とも臨時召集を受けました。私は、台北陸軍病院東門分院に配属され、衛生兵として終戦の年の十月まで四年間、軍隊生活を送りました。開戦から間もなく、12 月 17 日に南部の嘉義で大地震 (*M 7.1; 死者 360 人) が発生し、救護に派遣されて負傷者の治療に当たりました。

台湾人には、まだ徴兵がなかったので、病院には、看護婦も含めて内地人しかおりませんでした。病院には、戦地で負傷して腕や脚を失った者や精神に異常をきたした者も送られてきて、それは悲惨なものでした。その間、負傷兵を内地の病院に護送するために、何度か病院船に乗って内地を往来しています。

病院勤務と言っても、軍隊ですから外泊は原則として許されていませんでした。幸い、上官に理解のある人がいて、兵糧を食い荒らす鼠を三匹以上取った者には外泊を黙認してくれました。それで、皆が張り切って鼠取り競争を繰り広げたので、たちまち鼠の数が減っていき効果は靦面でした。終戦時の身分は、陸軍衛生伍長でした。妻は、その間新竹州の大湖に疎開しておりました。

30 年以上を、台湾で父子二代に亘り奮闘努力しましたので、田と畑を合わせると 10 町歩に余り、加えて馬一頭、水牛二頭、葉煙草の乾燥室二棟を持ち、アミ族の作男を住み込みで雇う豊かな農家になっていました。

戦争に負けて台湾は、中華民国に返還されることとなりました。大陸からは、郵政業務を引き継ぐ役人がやってきました。日本側に対しては、健康で指導的立場にある者は、引継ぎ業務のため台湾に残って欲しいとのことでした。私は、下心があつて残ることにしました。約一年間、引き継ぎ業務に従事しました。下心とは、私の私有財産が何とか自分のものにならないかと考えたのです。

しかし、終戦時に日本人の私有財産は全部、国家賠償の一部になっていて今更どうしようもないことが解ってきました。中華民国に帰化しても、台湾人と結婚しても、日本人の私有財産は、私の物にはならないということがはっきり解ったのです。私有

財産が自分の物にならないのなら台湾に残っても仕方がないので、泣く泣く人より一年遅れて昭和22年1月3日、妻と共に佐世保に帰って来たわけです。母は、既に吉野村で53歳で亡くなっておりました。父は、再婚もせず先に引き揚げていましたが、竹原で73歳で亡くなっています。

私は、4月から広島地方貯金局管理課庶務係を振り出しに、昭和42年に定年退職するまで貯金局に勤めました。50歳の頃に、廣池千九郎先生の提唱していた「モラロジー（*道徳の重要性を社会に提言する学問）」の思想に傾倒するようになりました。それからは自分中心の考え方から他人中心の考え方に変えて、人様のために奉仕しようと思いを決めました。定年後は、民間会社に移って昭和53年の71歳まで働きました。会社を辞めてからは、ボランティア活動に従事し、町内会長、老人会長を務めています。

81歳からは、廣池千九郎先生の設立したモラロジー研究所の参与を務めることになりました。102歳からは、さすがに足腰が不自由になって来ましたので、妻と一緒に介護付き老人ホームに入ることにしました。

平成23年には、結婚75年のダイヤモンド婚を迎えました。その長く連れ添った妻も翌年、100歳を目前にして浄土へと旅立って行きました。常に私のことを気遣い、誠心誠意尽くしてくれた妻でした。私たちは子宝には恵まれませんでした。本当に幸せな夫婦生活でした。今も毎日妻の遺影に手を合わせて話し掛けております。

いつの間にか、私も111歳を超え、広島県の最高齢者になってしまい、全国でも男性の長寿者として五指に数えられるようになりました。来し方を振り返ってみますと、長いようでもあり短いようでもあった111年間でしたが、理解のある妻と歩んで来られて自分なりに満足な人生だったと思います。当面の願いは、2020年まで生きて東京オリンピックを見ることです。それが叶えば、次は男性として誰も達成したことのない大還暦（*120歳）を目指してみようかなと途方もない夢を見ている今日この頃です。

(51) 内地人に嫁いで

陳 喜 (1924年生) 社寮公学校卒

私の父は農業で、台中州の竹山庄の社寮で茶の栽培をしておりました。断髪をして漢塾に通っていたらしいのですが、公学校には通っておりません。母は纏足をしていましたが、途中で止めたので歩行には不自由していませんでした。母は困り事があると、時折女占い師のところに行っておりました。占い師は歌ったり踊ったりせず、ただ話だけを聞いて吉凶を占っていたのです。

私は三人きょうだいの末っ子で、兄が二人おりました。兄たちは公学校卒業後中学

校には行かず、高等科に進んでいます。昔の台湾の田舎の常として、私は何度も養女に出されそうになったとのことですが、いつも最後は母が断っていたそうです。

私の家は、縦横百メートルぐらいで、高さ2メートル、幅50センチぐらいの屋根付きの土塀に囲まれた陳家の同族部落の中がありました。部落の中央には、陳家の先祖の位牌を祀った正庁があり、その周りを囲むように二十家族ほどが棟割り長屋のような家に住んでいたのです。

当時の社寮には、酒屋、肉屋、魚屋、食堂、旅館、駐在所、廟などがあり、医者も一人おりました。ただ、電気や水道は通っておらず、1938年頃に初めてバスが走りました。

私は、漢塾や幼稚園などには通わず、八歳で歩いて五分ぐらいの社寮公学校に入学しました。校舎は木造の平屋で、一学年一クラスの小さな学校でした。一クラス60人ぐらいでしたが、男女の席は左右に分かれておりました。女の子は25人ぐらい入学しましたが、卒業時は13人だけでした。当時、女の子で公学校に通っていたのは、五人に一人ぐらいでした。

たいてい裸足で通っていましたが、中には草鞋を履いてくる者もおりました。帽子はありませんでしたが、一応制服があつて、男の子は学生服で、女の子はジャンパースカートでした。手製の手提げカバンを持っている子もいましたが、たいていは風呂敷でした。先生方が子供を学校に入れようとして、家々を回って勧誘していた時代ですから、学校に行くとお菓子がもらえました。

先生方は優しく、あまり叩いたりしませんでした。一、二年は台湾人の先生でしたが、三年は内地人の先生でした。時々、友達と誘い合つて先生の家に遊びに行っておりました。三年の頃から、自由に日本語が話せるようになりました。運動会が農閑期に開催され、両親が弁当を用意してきて、皆で食べるのが楽しみでした。学芸会もありましたが、暇のある親だけが来ていました。

四年からは、女の子には裁縫の授業があつて、内地人の先生に習いました。ただ、料理の授業はありませんでした。男の子には農業の授業がありました。上級学校に進んだのは、10名ぐらいで、農業学校や補習学校などが主でしたが、中には台中師範学校に入った人もおりました。女の子は、女学校に進んだ人はおらず、高等科に4~5人が入っただけでした。大部分の女の子は、卒業後、洋裁や編み物を習ったり、家事を手伝ったりしておりました。

私も、例にもれず、家事や農作業の手伝いをしておりました。それが、昭和19年になって台湾でも空襲が始まり、山の方に疎開することになりました。それで、家族は内芽埔の長兄の所に避難することにしました。

ある日、長兄と知り合いだった警察部長が長兄を通して、「櫻井組で経理を担当している内地人の嫁に来てくれないか」と、縁談を申し込んできたのです。それで、仕

方なく部長さんの家で見合いをすることになりました。何でも、その人は「伊藤忠」と言って、私より四歳年上でした。東京の渋谷の生まれで、二卵性の双子でしたが、高等商業を出たのだそうです。それが、両親が亡くなっていたので、昭和14年に、台湾にいた叔父が双子の弟と一緒に台湾に呼んで、二人を製材会社の櫻井組に就職させたのだそうです。

最初の印象は、別に良くも悪くもありませんでした。長兄と父が乗り気になり、もう結納金をもらってあるからと、私に相談なく勝手に式の日にちを決めてしまいました。私は、日本語もろくにできない台湾人の娘がどうして内地人の嫁になれるのかと思いました。当時は親の決めたことには反対できなかったのです。

結婚式は、昭和19年の6月に、夫が働いていた中央山脈の「望郷山（＊海拔3241m）」の山腹にある櫻井組の集会所で挙げました。望郷山には、陸軍用の製材工場があったのです。製材工場は、海拔二千メートルくらいの所にあったので、冬は雪が降り、台所の水が凍りました。水道がなかったので、水は山から樋で引いてきて使っていました。電気はありましたが、暖房はストーブで木材を焚いていました。

私は、竹山からハイヤーで水裡坑に行き、そこで一泊し、そこからは台車（＊トロッコ）や索道（＊簡易ロープウェー）を使って丸一日掛け、ようやく集会所に辿り着きました。

式には、櫻井組の内地人の幹部と台湾人の労働者が合わせて200人ほど参列してくれました。ただ、私の両親は来られませんでした。兄二人が来てくれました。夫の方は、双子の弟が既に出征していたので、親族は誰も来ませんでした。当時の世相を反映して、私は着物にモンペ、それと足袋を履き、夫は国民服を着て式に臨みました。ただ、料理は山の集会所にしては驚くほど豪勢な御馳走でした。結婚を機に、「伊藤喜子（よしこ）」と日本風に名前を改めました。

翌朝、兄二人が帰る時、索道の乗り場まで見送ったのですが、これからどうして暮していけばいいのか自分でもわからず、故郷の竹山の方角を眺め下ろしては、涙を流すばかりでした。

次の日、主人が内地人の奥さん方から炊事道具を借りてきたので、食事の支度をすることになりました。私は、花嫁修業は何もしていないまま結婚したので、日本料理はもちろん台湾料理も満足に出来ませんでした。それなのに、独身の内地人の社員の分まで食事の支度をし、さらに弁当まで用意することになったので、目の回るような忙しさでした。特に、朝食の支度は、寒さに慣れていない私にはとても辛いものでした。

それでも、懸命に家事に励んでいたのですが、ある事で、無念にも濡れ衣を着ることになってしまいました。それは、配給された生地三枚を、以前からの習慣通り、私の押し入れに仕舞っておいて、他の人に渡すのを忘れてしまったためでした。それで、

私が生地を盗んで里の実家に持って行くと誤解され、事務所の人たちに咎められてしまったのです。とんだ濡れ衣だったのですが、主人の面子を潰してしまったので、私は別れたいと主人に申し出ました。その時は、まだ主人の籍に入っていなかったのです。主人は、これくらいのことで別れることはないかと懸命に慰留してくれたので、思い止まったのでした。

また、炊事を担当していた台湾人の娘さんがいましたが、私とは親しい間柄でした。その人が、ある日、私に向かって台湾語で「台湾のゴハンを食べて日本のウンチをしている」と言ったのでした。その意味がよく解らなかったので、他の人に聞いたところ、それは私が台湾人なのに、内地人に嫁いだという悪口だとのことでした。それを聞いて、私は、内地人と結婚した以上、どんなことを言われても絶対耐え忍んでみせると決心したのです。

昭和 20 年の 8 月に終戦になりましたが、主人は国民党の林務局に留用され、引き続き望郷山で働くことになりました。それで、日本への強制送還は免れ、夫婦別れの悲劇は何とか回避できました。

終戦の年の 11 月に、長女の智子（*戦後は「智娥」と改名）が生まれました。前夜に台風が来襲して、福利社の屋根が飛ばされて、米や砂糖が水浸しになってしまいました。夕方になって陣痛が始まりましたが、主人は頼りなかったので、留用で残っていた内地人の奥様方に手伝ってもらって、無事智子を出産しました。智子が三歳の時、長男の孝一が生まれました。今度も、内地人の奥様方のお世話になりました。

孝一が生まれて半年ほど経って、突然主人が員林の刑務所に拘留されてしまいました。何でも、留用期間が過ぎたので、強制送還されるとのことでした。大慌てで、員林の刑務所に行くと、主人は台北の圓山収容所に送られてしまっておりました。私は台北には行ったことがなかったので、日本人の三宅さんに連れられて面会に行きました。主人の前では涙を見せませんでしたが、宿に帰って子供のことを思うと涙が止まりませんでした。

三宅さんの尽力で、関係者に事情を話し、ようやく主人が帰国せずに台湾に留まってもよいことになりました。お世話になった三宅さん御夫婦は、もう年を取ったので、留用を辞退して日本に帰ることになりました。頼れる人のいなくなった主人は、台湾で生きていく覚悟を決めたのか、二人で他人に笑われないように頑張っていて、子供二人には大学まで行かせようと、私に誓ってくれました。

望郷山には、都合 8 年間おりましたが、今でも忘れられないのは、索道からの転落です。孝一を妊娠して 8 か月の頃、三歳の智子を連れて下山して母に会いに行き、一緒に廟にお参りして神様に安産のお祈りをして来ました。帰りの登り道は大変なので、無理をお願いして索道を利用することにしました。むずかる智子をおぶったまま、索道に乗って上がっていくのですが、なんとしたことか、ふと手を放したはずみに索

道から下の谷底の森に娘もろとも転落してしまったのです。

谷底までは、20メートル以上あったと思われますが、気が付いた時は、主人や職員の方に囲まれておりました。智子のことを尋ねると、なんと怪我もせず歩き回っているとのことでした。木の枝に落ちた後、斜面の柔らかい萱の茂っているところに転落したため、怪我もせず、流産もせず、かすり傷だけで全く奇跡的に母娘が助かったわけです。皆さん方もあまりの不思議さに驚いておりました。

それでも、落下のショックで翌日からは体中が痛んで歩けなくなり、一週間ほど床に就いておりました。その索道では、一か月前にも転落事故があり、索道の修理工の方三人全員が亡くなったばかりでした。ただ、神様の御加護で、娘と私、それとおなかの中の孝一の三人の命が助かったことに対して、感謝の念を捧げるだけでした。

終戦の報は望郷山で聞きましたが、日本が勝つものとばかり思っていたので、本当に落胆してしまいました。主人は、しばらくの間、ヤケ酒を飲んで気を紛らしておりました。私は、国民党に日本名はいけないからと「伊藤喜子」から「陳喜」と、元の名前に変えさせられました。当時は、台湾が支那に戻るのか、日本に残るのか皆目解らず、不安でいっぱいでした。

終戦後、夫は国民党の林務局に留用させられ、日本には帰してもらえませんでした。夫の両親は既に亡くなり、櫻井組と一緒に働いていた双子の弟も未婚のまま日本に帰りましたが、昭和24年に病を得て亡くなったそうです。

日本に誰も身寄りのいなくなった夫は、台湾に残ることに決めて中華民國の国籍を選択し、名前も「陳忠」と改名して国民党に入党し、台湾の公務員になったのです。仕事は、林務局の会計課長でした。幸い、二・二八事件の影響もなく、同僚からは大事にされて仕事の面では恵まれていたようです。子供は、娘と息子の二人だけです。夫は、台湾語が下手だったので、家の中では日本語でした。ただ、後には仕事上、北京語は流暢になりました。

夫は、公務員になったため日本に帰れなくなり、代わりに私が日本に渡って、親戚との連絡を取っていました。夫は酒が好きでしたが、酔うと「日本に行ってみたい」と洩らすことがありました。夫が終戦後初めて日本に帰ったのは、退職してからですので、昭和の終わり頃でした。

台湾の女性と結婚した日本の男性は、終戦後、台湾に住めなくなったので、女性と一緒に日本に帰るか、あるいは別れて男性だけが日本に帰るといった場合が多かったのです。ですから、私たちのように男性が中華民國の国籍を取って台湾に残ったのは珍しい例と言えましょう。

私たちは、望郷山で八年、水裡坑で十年以上、台中で二十年以上暮らしましたが、周りの台湾人は日本語が出来たので、夫は、言葉の面では不自由しなかったようです。幸い、智子と孝一の二人を大学まで行かせることが出来ました。智子は、高校の先生

になって定年まで勤めています。孝一も、会社に入って定年まで勤め上げました。私は、夫が優しい人だったので、日本人と結婚したことについては全然後悔しておりません。

(52) アミ族の娘

張文静(日本名; 倉本文子)(1925年生)花蓮港高等女学校卒

私は台湾先住民のアミ族(*台湾東部の花蓮県と台東県の平地に居住)の一人娘で、花蓮港に生を享けました。生まれた時から日本名の「文子」でしたので、アミ族名はありません。父(*アミ族名; アドゥブ)は、公学校に六年間通った後、警丁として勤務しておりました。警丁になった際に、「国次郎」と日本名に改名しています。当時、警丁はアミ族から大変尊敬されていたのです。

母(*アミ族名; プラツ)は父より5歳下ですが、公学校には四年間通ったそうです。結婚した際に、「米子」と日本名に改名しています。母はクリスチャンですが、父や私は、アミ族の伝統的な祖先崇拜の信奉者です。父方の曾祖父が漢族だったせい、父は台湾語も出来ました。

アミ族は母系制でしたが、母が16歳の時、母を見初めた父が人を介して、母に求婚してきたのだそうです。母の両親は、父が警丁だったので、直ぐ承諾したとのこと。母は家において、裁縫の仕事をしていました。両親は大変仲が良かったのですが、喧嘩するとお互いに口をききませんでした。家庭では日本語で話していたので、私は終戦になるまで日本語しか話したことはありません。アミ語は、戦後に習ったものです。

祖父母は、花蓮港の郊外のアミ族の部落に住んでいて稲作に従事していましたが、日本語は全然できませんでした。市内には、アミ族はおりませんでした。当時、アミ族は内地人から苛められるというようなことはありませんでしたが、配給などで内地人から差別されて軽視されてもいました。ただ、父が警丁だったので、家族は内地人の街の中に住んでおりました。家は、畳の部屋や風呂もある日本家屋で、食事や服装も内地人と同じでした。

母は周囲の内地人の奥さんたちと付き合っていたので、内地人の行儀作法を身に付けておりました。母は時折着物を着ていましたが、それは別に強制されたものではなく、内地人の奥さんたちの着物姿に憧れて、自発的に着ていたのです。

私は幼稚園には通わずに、昭和8年にアミ族と漢族の学校であった田浦公学校に入学しました。田浦公学校は、平屋の校舎で一学年一クラスでした。50人ほどの生徒がいましたが、アミ族と台湾人では、アミ族の方が多かったように思います。先生方は、二人のアミ族の先生を除いて皆内地人でした。制服はなく自由でしたが、教科

書を風呂敷に包んで裸足で通っていました。

学校では、喧嘩や苛めなどはせず、仲良く遊んでおりました。私は家で日本語を話していたので、日本語は大変流暢でした。それが校長の耳に入って、父に「娘さんは日本語が流暢だから、将来のことを考えたら小学校に入れたほうが良い」と、日本人の学校である小学校への転校を勧めたのだそうです。それで、三年生に上がる際に、花蓮港の朝日小学校に転校させられたのです。小学校でも制服はありませんでしたが、私はランドセルを背負い、運動靴を履いて通うようになりました。

朝日小学校は先生も生徒も全員内地人で、漢族はおらず、アミ族は私一人だけでした。ただ、後輩には、アミ族の男子の生徒が二人いましたが、いずれも警丁の息子でした。三年と四年は女の先生でしたが、五年と六年は男の先生でした。クラスでただ一人のアミ族の生徒でしたが、先生が常々「苛めは良くない」と言っていたので、苛められたり喧嘩したりしたことはありません。先生方は厳しかったのですが、私は成績が良かったので、叩かれたりしたことはありません。

朝日小学校を卒業して、花蓮港高等女学校に入学しました。一クラス 50 名でしたが、台湾人は一割の五名でした。月組と雪組の二クラスがあつて、私は雪組でした。制服があつて、カバンは肩掛けカバンでした。通学時は下駄を履いていましたが、校内では運動靴でした。

先生方は公平で、台湾人だからと言って差別するようなことはありませんでした。内地人の級友からも表立って差別されたりするようなことはありません。ただ、一年から四年まで台湾人で三番以内に入った人はおりません。優秀な台湾人の生徒もいましたから、おそらくこれは学校の方針で、台湾人は三番以内にはしないという暗黙の了解があつたのではないかと、台湾人の生徒たちは不満を漏らしておりました。

当時、私は自分のことを一応日本人ではあるが、それでも内地人とは違うアミ族とっておりました。内心、内地人に対して引け目を感じていたのです。それで、馬鹿にされないように、一所懸命勉強に精を出しておりました。アミ族は従順な民族だったのですが、台湾人はアミ族ほど従順ではなく反抗する人も少なくありませんでした。私の親友は内地人の二人で、何時も三人で行動していましたので、「雪組の三羽ガラス」と呼ばれておりました。生徒同士では民族に関係なく隔てなく付き合っていたのですが、親同士には目に見えない溝のようなものがあつたように思います。

同じ雪組に、「石月」さんという平埔族出身の級友がおりました。石月さんは、花蓮港の明治公学校出身でしたが、成績は私よりも優秀でした。

私は花蓮港高女を昭和 18 年に卒業し、校長の推薦を受けて、台北第一師範に開設されていた臨時教員養成科に入りました。他には、石月さんと漢族の人が一緒でした。三月の下旬の僅か一週間という短期間の講習でした。ですから、教授法や教育心理学の概説や付属の小学校の先生の授業の見学が中心というものでした。

修了後、直ぐ二年生まで通った田浦国民学校の助教になりました。石月さんも母校の明治国民学校の助教に配属されました。初任給は40円でした。服装は、女学校の制服ではなく洋服で、髪は二つに分けて結んでおりました。

クラスは一学年二クラスで、アミ族と台湾人のクラスに分かれておりました。三年の担任でしたが、どういう訳か、アミ族のクラスではなく台湾人のクラスを受け持たされました。反対に、アミ族のクラスの担任になった台湾人の先生は、クラスが逆だと怒っていました。授業では、日本語だけで教えました、別に何の問題もありませんでした。どうも生徒たちは、私のことをアミ族ではなく内地人だと思っていたようです。台湾人の生徒で改姓名している者は少数でしたが、アミ族も日本名は少なく、カタカナのアミ族の名前の方が多数でした。

勤めて二年目の夏、警察の人が家に来て看護助手に志願するようにと勧誘されました。私としては先生を続けたかったのですが、父の立場上仕方なく志願することになりました。友人や知人からは行かない方が良いと言われていたのです。実際、従兄弟が義勇隊に志願して南方に派遣されたのですが、まだ戻っていなかったのです。花蓮港では100名試験を受けて、三名だけが合格しています。

台北では、看護婦の訓練は受けず、三か月間、主に看護助手の心構えとしての精神訓話だけを聞かされました。高雄から輸送船に乗り、香港に送られました。そこで初めて一週間看護婦の訓練を受けています。修了後、陸軍病院の薬局に配属されましたが、日直の時は病人の面倒も見ておりました。時折、空襲警報が鳴りましたが、病院が空爆されることはありませんでした。

病院では、看護助手は大変大事にされ、内地人の看護婦からも可愛がられました。看護婦は皆内地人で、30代から40代の方が大部分でした。看護婦から、よく「この子は私の娘なの」と冗談を言われておりました。仕事は、主に薬を配達したり管理したりすることでしたので、思っていたよりも楽でした。時には、インド人の病人に「あんた、日本は負けるよ。もうすぐ戦争は終わるよ」と言われて、喧嘩したこともあります。

日曜日には、赤十字の制服で同僚と街に遊びに出掛けましたが、軍隊の車で送り迎えをしてもらっておりました。給料は優に100円を超えていたと思いますが、半分は軍が自宅に送ってくれていました。

一年ほど過ぎて、今度は広東の陸軍病院に配属されました。勤務先は、香港と同じく薬局でした。仕事も同じで、毎日が楽しく張り合いのあるものでした。終戦は、広東で迎えました。終戦の時、病院長から「皆さんの任期が終わったら、内地の赤十字の病院に送って、本当の看護婦にしてあげたいと思っていたが、終戦で出来なくなりました。本当に申し訳ない」と言われました。私は、少し悲しかったのですが、これからどうなるのかと、将来を心配しておりました。ただ、看護助手になったことについて

は、別に後悔しておりません。色々なことを学んだので、むしろ良い経験になったと思っています。

私達は直ぐ台湾には戻らず、一旦香港に移されました。九月の初め頃、香港から台湾に帰りました。花蓮港に帰ってみると、家が無くなっておりました。両親は田舎のアミ族の部落に引っ越していたのです。台湾に帰ると、名前を日本名から漢族名に変えさせられました。姓は父方の曾祖父の姓の「張」に、名は花蓮港高女の「荒木静江」という優しい先生から「静」の一字を頂いて「張文静」にしました。

花蓮港に戻ってからは元の国民学校に復職し、教鞭を執ることになりました。学校では、衛生担当の責任者を任されました。その後は、二歳上の台北師範を出た客家系の台湾人と結婚し、教職の道を歩むことになったのです。

(53) 杭州西湖のほとりで

黄守禮 (1933 年生) 杭州日本国民学校

私の曾祖父は泉州系ですが、大陸の杭州に住んでおりました。もともと大陸の人間でしたが、科挙に合格して台北府の役人になったので、眷属を引き連れて台湾に住むことになったのだそうです。曾祖父は、杭州の他に北京と上海にも邸宅を構えておりました。

清朝時代、下級の役人は台湾人でしたが、上級の役人は大陸から三年交代で来ていたのだそうです。また、台湾では徴兵は行われておらず、兵士は主に広東から来ていました。他にも、私兵がいましたが、匪賊が跋扈して治安は大変悪かったとのことでした。

台湾が日本の領土になった際、曾祖父は清朝の官吏だったので日本の支配を嫌い、祖父を連れて大陸の杭州に移ったのだそうです（*官吏を中心に約 5500 人が大陸に渡る）。

しかし、程なくして曾祖父は亡くなってしまい、祖父だけが台湾に戻って来ました。理由は聞いていませんが、おそらく当時の大陸は治安や衛生の面で劣悪だったために、異国となった台湾に戻って来たのでしょう。それ以来、祖父は、常々「台湾好、台湾好」と言っておりました。祖父は辮髪を切っていましたが、亡くなっていた祖母は纏足をしていたそうです。

私の父は 1903 年生まれで、太平公学校を出て台北工業から東京高等工業学校（*東京工業大学の前身）に進み、有機化学を専攻しました。終戦後は、台湾大学の有機化学の教授を務めております。父は日本語がとても流暢で、英語も家庭教師に習っていたので、大変上手でした。また、子供の頃から、大陸出身の陳さんという人に北京語を習っていたので、北京語は完璧でした。公学校では北京語を教えなかったのです。

が、個人で習いに行っても構わなかったのです。それは、将来大陸に渡るために習っていたのではなく、読書人の家系として、文学を学ぶためには北京語が必要だからという祖父の意向からでした。

一方、母は蓬萊女子公学校を出て、内地人の学校である台北第一高女を卒業しております。もちろん纏足はしておりません。父は酒を飲みませんでした。母は酒が大好きで、一杯入ると「婦人従軍歌」などの軍歌を歌っておりました。母は、時には和服を着ていましたが、私が「海軍に行きたい」というと、「よし、頑張れ」と励ましてくれるほどの軍国の母でした。母は18歳の時、6歳上の父と結婚しましたが、二人とも名家の子女でしたので、顔はお互いに知っていたそうです。

両親は、家では日本語を使っていました。それで、私は難なく日本語が話せるようになっておりました。母は父のことを「おとうさん」、父は母のことを「おかあさん」と日本式に呼び合っておりましたが、これは特殊な例でしょう。また、生活様式も日本の影響を受けて台湾の上流家庭のように男女を分けず、同じテーブルで男女の家族と一緒に食事をしておりました。

私は、小学校に入る前に、二年間内地人の幼稚園に通いました。幼稚園を終えて、内地人の学校である台北の幸小学校に入学しました。その際、簡単な面接試験があって、「将来、何になりたいか？」などと日本語で聞かれましたが、私は大きな声で「海軍に行きたい」と答えたことが思い出されます。他にも簡単な足し算と引き算の問題があったように記憶しています。

当時、田舎には幼稚園がなかったので、ほとんどの台湾人は小学校には入れず、みんな公学校に行っておりました。小学校に入るには、日本語が出来なければいけなかったからです。しかし、台湾人が公学校に入る場合には、面接などはありませんでした。台湾の小学校の校舎や設備は、内地のものよりも充実していました。

当時の台北は、広い通りに壮麗な建物が建ち並び、実に美しい街でした。市街地の中央を流れる川にハヤが泳いでいたのです。それが、終戦後戻って来てみると、国民党の軍隊や大陸からの避難民が住み着いて、雑然とした薄汚い街に変わり果てておりました。

父は参謀本部の嘱託になっていましたので、改姓名令が発せられる4~5年前に特別に改姓名して日本名を名乗っております。私も、「江口守禮(えぐちもりつね)」と改姓名しましたが、子供でしたので別に感慨はありませんでした。当時は、自分のことを日本人と信じて疑ったことはありません。

二年の時に、父は支那派遣軍の嘱託になり、高等官に補されました。月給は、他の役職と合わせると、巡査の月給が40円ぐらいの時代に、優に500円を超えていました。父の仕事は、日本軍が攻め込む前に、敵と話し合いをしに行くことです。もし、降伏しないのなら、日本軍が攻め込むのです。それと捕虜の世話や通訳でした。国民

党の兵隊は、貧しい農家の男が無理やり兵士にさせられたのが多いので、捕虜にして武装解除したら、少しばかりの米を持たせて家に帰してやるのです。皆喜んで帰って行ったそうです。戦後に聞いてみたのですが、父の場合、捕虜の虐殺などはなかったとのことでした。

父は、一時浙江省の衛生局長を兼任して、西湖や杭州の衛生状態の改善に尽力しておりました。杭州は、1937年に日本軍が占領して軍政を布いていたのです。杭州の市内は、電気や水道が通り、道路は舗装されてバスが走っておりました。ちなみに、私の家のトイレは水洗でした。

その父の関係で、私は二年の時、風光明媚な西湖のほとりにある杭州日本国民学校に転校することになりました。杭州では、二階建ての200坪の白壁に黒い窓枠の豪邸に住んでおりました。家には支那人の使用人が16名ほどいて、専用のコックもあり、人力車も三台ありました。学校は、三メートルぐらいの道を挟んで西湖に臨んでいました。近くには、杭州神社が鎮座しておりました。校舎は煉瓦造りの二階建てでしたが、内部は全部檜作りで、威容を誇っておりました。プールはありませんでしたが、講堂や図書室は整っていて、校庭も十分に広いものでした。教室では、スリッパを履かず、靴下だけでした。

一学年一クラスで、一クラス30~40名が在籍しておりました。学校の先生や同級生は、皆内地人でした。時々、支那人の小学校と交流していましたが、互いに日本語と支那語のチャンボンで意思の疎通をしていました。杭州で暮らすうちに自然と北京語を覚え、流暢に話せるようになっておりました。

先生は皆素晴らしい方々で、今でも当時の先生方の写真を見ると泣けてきます。特に、広島高等師範出身の瀬之口先生は本当に優しく大好きでした。先生は高等師範を出ていたので、普通でしたら中等学校の先生になっていたはずですが、事情があって小学校の先生になつたらしいとのことでした。先生は軍隊の階級は中尉でしたが、昭和19年に召集されて行きました。残念なことに、先生は復員後広島で原爆に遭い、亡くなったそうです。

日本時代の教育の特徴としては、先生方の資質が素晴らしく、優秀な先生が沢山いたということでしょう。内地人が台湾に来ると、内地での給料に6割方加俸されておりました。それは、内地から渡ってくるのには治安面や衛生面で大変なことが沢山あったからです。

昭和16年頃、陸軍の板垣征四郎大将が支那派遣軍の総参謀長として杭州に来たことがあります。板垣大将は、部下から私たち兄弟の噂を聞いていたらしく、父に「上の息子さんは優秀で長崎の中学に行ってるそうだし、下の息子さんも幼いのになかなかの傑物と聞いているので、是非会ってみたい」と言うので、私を将校クラブに連れて行ってくれたのです。

将校クラブに行ってみると、皆が外に出て来て出迎えてくれました。父が私を板垣大将に紹介すると、大将は「おう、坊や、聞きしに勝る良い顔をしているなあ」と気さくに声を掛けてくれました。次いで「坊や、将来何になる」と聞かれましたが、子供でしたので陸軍と海軍の仲の悪いことは知りませんから、「はい、海軍に行きます」と答えてしまいました。大将は、鷹揚に「ほう、そうか。頑張れ」と励ましてくれました。そして、「これを持って来たからあげる」と、フランス製の大きな鉄製の箱に入ったチョコレートをくれたのです。大将は、本当の武人で気配りの人という印象を受けました。

その場には、母も洋装で同席していましたが、陸軍の大將に直々声を掛けてもらいましたので、軍国の母は感激の極みのようなのでした。母は、杭州では色々な会合に出ていましたが、内地人とだけ付き合っておりました。また、大日本婦人会の副会長も務めていました。

小学校五年の時、台湾総督府から長谷川総督の指示で東京の学習院の中等科に行くようにとの内示がありました。私は、皇太子殿下の御学友になることになっていましたから、午前中は学校に行き、午後からは学校の前にある日本軍第10司令部に行っておりました。ここには、何人かの学生が手伝いに来ていました。

私の兄は、長崎中学を卒業して海軍兵学校を受験し、みごと合格しております。昭和20年に、78期生として入学しましたが、台湾人では初の海軍兵学校の入学者でした。ただ、卒業前に終戦になってしまい、兄の海軍士官の夢は儚く消えてしまいました。

杭州では、日本人と支那人の住んでいる所は、はっきりと分かれていたので、関係は別に悪くはなく、敵意も感じられませんでした。支那人の統治していた地域は治安が良くありませんでしたが、日本人が統治していた地域は治安が良好でした。それが、終戦後三日経ったら、日本人の統治していた地域までが治安が悪くなって滅茶苦茶になってしまいました。

8月15日の陛下の放送も司令部で聞きましたが、雑音で良く解りませんでした。ただ、前の方にいた参謀隊長が悔しがっていたので、「ああ、日本は負けたのか」と思いました。そして、「俺は、支那人になるのか」という気がしてきて本当に落胆してしまいました。母は、日本の敗戦の報に接してからは、放心状態で一日中椅子に座ったままでした。

戦後、学校は国民党に接收され、なんと浙江師範大学になってしまいました。終戦の一週間後、私は北京語が話せるので、支那服を着て学校に潜り込んでみました。すると、私たちが毎日糠袋でピカピカに磨いていた檜の床は、土足で踏み荒らされて傷だらけになり、真っ黒になっておりました。

終戦で、学校は閉鎖されてしまい、私の家族は上海の租界に移りました。そこで、

翌年の三月に帰台するまで、父から毎日、5～6時間、北京語と英語、それと数学の特訓を受けていました。

父は、大陸で和平工作や疫病対策に従事していたので、国民党からは民衆のために貢献したと評価されておりました。ただ、共産党からは日本の政策に協力した漢奸（*売国奴）として命を狙われていたので、父は杭州の家には戻らず、私と一緒に逃げるようにして上海から小さな100トンのボンボン船で引き揚げて来ました。家に残された母と弟妹たちは、後でジャンク船に乗り、台湾に無事戻って来ました。

上海から基隆まで8日掛かりましたが、やっと台湾に辿り着いた時は、これで故郷に帰って来たと思いました。その際、別れた小学校時代の仲間とは、今でも連絡が取れていません。

〈続〉